江戸時代の本



江戸時代の本 - 人々の学びと楽しみー

江戸時代、武士と農民・商人といった厳格な身分制度がある中で、庶民は文字が読めなかったと 誤解されることもありますが、識字率は6割を超えていたといわれています。これは藩校や各地に 寺子屋が開かれて、庶民が「よみ・かき・そろばん」を学ぶ機会があったためです。

書籍はそれぞれの生業に必要な知識・教養を身につけると共に、娯楽が少なかった時代においては貴重な機会を提供するものでした。

江戸時代は木版印刷技術の発達と庶民の識字率の高まりと読書需要の増加により、書籍の大量生産に伴い多様なジャンルの本が出版されました。生活に必要な実用書や専門書、名所の案内書、大衆向けの小説などが刊行され、現在も多くの本が各地に遺されています。

現在、須坂に残る江戸時代の本はほとんど江戸の出版社(版元・書肆・書林など)が出したものです。現在の須坂市域に本を商う商店があったか不明ですが、参勤交代や江戸との商売などでのついでに購入していたことと思われます。しかし、須坂市域にも幕末になると貸本屋がありました。また、個人間での本の貸し借りもありました。

文書館が収蔵する江戸時代に発刊され武家・農家・商家などに残された本から、当時の人々の学び、暮らし、娯楽などを探ってみます

【江戸時代の識字率】

江戸時代の識字率が6割を超えていたといわれる原因は、各地に寺子屋が開かれて、庶民が「よみ・かき・そろばん」を学ぶ機会があったためです。

須坂市域に開かれた寺子屋の数ですが、慶応以前に開業したと推定され、筆塚が残る寺子屋師匠 については次の表のとおりです。

「海に土状の笠厚し土フ巴佐尼」	/ + =+ / * D / F 2	452)
「須坂市域の筆塚と寺子屋師匠」	(田誌4巻245/・	4531

旧村名	師匠の身分別人数					計(人)		
	医師	僧侶	神官	武士	農民	工匠	商人	
須坂村	5	4		3	2		1	15
小山村	1	5	1		5	2		14
日滝村		3		1	4			8
豊洲村		9		1	2			12
日野村	2	3			4			9
井上村	2	1	2		4			9
高甫村	1	7			4			12
仁礼村	1	2	1		4			8
豊丘村		1			3			4
綿内村	3	1	2		4			10
計	15	36	6	5	36	2	1	101
割合	14.9%	35.6%	5.9%	5.0%	35.6%	2.0%	1.0%	100.0%

【印刷方法】

江戸時代の文章は現在のように各文字が離れてはおらず、各文字がつながった連綿体で書かれていたために、一文字ずつを組み合わせて製版することはあまりなく、ページごとに版木を作って印刷する木版印刷でした。

また、木版印刷による刊本の外に、それを筆写した写本も多く残されています。

【論語注釈書】

孔子の言行・問答、門人の言葉などを集めた語録で儒教の重要な文献。四書の第一、十巻。編纂の事情ははっきりしないが門人たちの間でたくわえられた記録が伝承され、孔子のものとは考えられにくい後世の付加文も交えて編成されたもので、おそらく漢初(前 200 年ごろ)のまとめであろう。

(注釈書の誕生)

漢代に儒教が国教となると『論語』は『孝経』とともに五経に準じて尊重され、それがその後の伝統となって、注釈も多くつくられることになった。漢代の諸注釈を抜粋して集め、古注として今に伝わるのは魏の何晏(かあん)の『論語集解』である。やがて、その再注が作られ、梁の皇侃(おうがん)の『論語義疏』と、宋の邢へイ(日に丙けいへい)の『論語注疏』とがその時代の代表である。

(朱子学の発展)

宋学では五経よりも四書が尊重され、『論語』はその筆頭として特に重視されたが、朱子は新しい哲学的解釈を加えて『論語集注』を作った。元以後、朱子学の流行とともに科挙と結びついて広く 読まれた。

(日本への伝来)

日本への伝来は漢籍渡来のはじめとして『千文字』とともに百済の王仁によってもたらされ(『古事記』)、王仁の渡来は応神天皇 16 年 (285) のこととされる(『日本書紀』)。

(江戸時代の『論語』)

江戸時代に入ると朱子学は幕府の庇護を受け、朱子の『四書集注』は林羅山の道春点をはじめ多く の人々によって訓点をつけて出版された。

元禄の頃になると学舎の研究が盛んに行われたほか、江戸時代後期では藩校から市井の寺子屋までの教育にも『論語』は広く用いられ、日本人の一般教養に大きな影響を与えてきた。(国史大辞典 抜粋)

『論語』は古典籍が残されていた家には必ずと言ってよいほどありました。その中でも、一軒のお宅で熱心に学んだ証としに7種類の論語が残されていました。

ここでは論語の巻第三(公自長第五、雍也第六)の中の第六編(雍也第六)の 20 番目の文章である次の一文について注釈書による違いを見てみます。

「子曰く、之を知る者は之を好むものに如かず。之を好む者は之を楽しむ者に如かず」 ◎概意

知っているということは、好むということにはかなわない。好むということは、楽しむということにはかなわない。

『四書 論語』065-C-117



『論語集解 (ろんごしっかい)』065-C-38

中国後漢末期から三国時代の魏の儒学者である何晏等によるものとされる『論語』の注釈書。朱熹による『論語集注』の「新注」に対して「古注」と称される。完本として伝わる最古の『論語』の注釈書である。

◆注釈文

包子曰く学び問いて之を知る者は、之を好む 者の篤きにしかず。之を好む者又之を楽しむ 者の深きにしかずなり。



『論語集解義疏 (ろんごしっかいぎそ)』065-C-31

梁の皇侃(おうがん)が、何晏の『論語集解』 をもとに、更に注釈を補填した書





『論語集注 (ろんごしっちゅう)』065-C-2・C-11

南宋の儒学者である朱熹(朱子)による『論語』の注釈書。「新注」と称される。

◆注釈文

伊氏曰く之を知る者この道有るを知る者なり。此れを好む者、好み而得られずなり。此れを楽しむ者得るところ有りて、これを楽しむなり。張敬夫曰く之は五穀の譬え知る者。其は食べるべきを知る者なり。好む者は食して之を嗜む者なり。楽しむ者は此れを嗜みて飽きる者なり。知りて好み能わず、則ち是知るの至らざるなり。之を好みて楽しみにおいて及ばざる、則ち是は之を好み至らざるなり。此れは古の学者は自ら強いてやまずゆえんの者よ



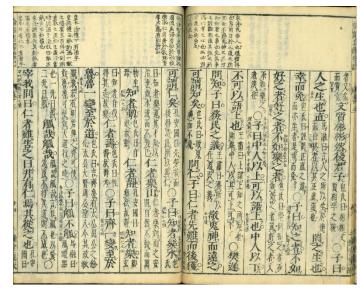




『論語集解標記 (ろんごしっかいひょうき)』065-C-35



幕末の儒者岩垣竜渓が著した『論語集解』の 注釈書

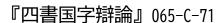


『論語参觧(ろんごさんかい)』065-C-111

江戸時代後期の需学者・鈴木朖(すずきあきら)が日本で初めて訓読を施し、その内容を詳しく解説した注釈書のこと

◆注釈文

之とは道なり。知るは其の貴きめでたき事を 大抵に知るをいう。好むは愛するなり。学ぶ寸 の心なり。編首の亦悦ばずや之なり。再有子の 道を悦びざるにあらずといえ、圧力足らずと いいて、学びざるは誠に好むにあらず。ただこ れ知るというほどなるべし。楽しむは余念な く心面白きなり。学びの功つもりて得たる所 ある寸の心なり。亦楽しみやこれなり。知るは めでたき人のめでたきなる事を知るが如し。 好むは恋慕するなり。楽しむはわが妻にい得 たる寸の心なり。

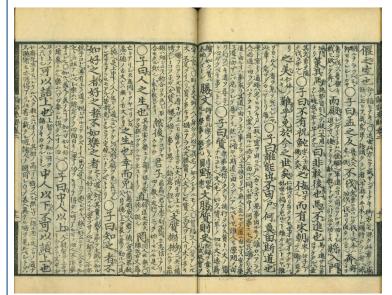


江戸中期に四書(大学、中庸、論語、孟子) を国字で解説した書籍。

◆注釈文

之を知るとはこの道というものがあるという 事を知りたるをいう。之を好むとは道を好き このんで一ケ乎に入らぬ人のことじゃ。之を 楽しむとは、学問が手に入りておもしろくな りたるをいう。今生まれつきに品々あり。ま た学力の高下ある事を論め、学者らすすめた まうとこのの意ことばの外にあり。









【往来物】

平安時代末期以来明治初年に至るまで、広く行われた書簡文体の初級教科書の総称。往来とはそれがもともと往返一対の消息文例集の形態を有していたことから名づけられた名称であるが、鎌倉時代中期以後には往々書簡に常用される単語・単文の類を集めた網のを「往来」と称するようになり、往来の語はそのままで初等の教科書(読本であると共に習字手本)を意味するようになった。中世以前のものは普通、貴族・僧侶の手になり、近世に入るに従って文人や手習師匠の手になるもの多くなったと考えられる。その教科書としての編集目的からすると主として習字用に字尽くし、名寄せの形式をとったものと消息文例を通して社会生活に必要な礼儀作法や日常百科の知識・心得を教えようとした内容本意のものとに大別することができる。

その編集形式は江戸時代は寺子屋の普及、庶民教育の発展に伴って塵・歴史・産業・経済などあらゆる方面にわたる日用の知識を、その文字とともに教えるのに往来の型式をもってしたので、多様な型式が作成され、明治に西洋風の学校教育が行われるようになるまで存続した。(国史大辞典抜粋)

『御手本(商売往来)』041-D-8

文化 13 年(1816) 江戸地本 錦森堂 森屋治兵衛版

「商売往来」は、寺子屋などで使われた往来物(教科書)の一種で、商業に関する知識や心得を教えるために作られました。内容は、取引に関する記録、貨幣、商品、商売の心得などで構成され、商売に必要な基礎知識を学ぶための教材として広く使われました。特に商人の子弟向けに作られましたが、貨幣経済が広くいきわたった幕末には村役人にとっても必要な内容でした。

◆読下し文

凡そ商売持ち极、文字、員数、取り遣りの日記、証文、注文、請け取り、質入れ、纂用帳、目録仕切りの覚なり。まず両替の金子大判・小判、一分・二朱金くらい品多く、いわゆる南鐐、上銀子。丁豆板(ちょうとうばん)、灰吹等考え。贋輿本手。貫目。分。厘。毛



『女大学寶文庫』041-D-56

天保 15 年(1844)3 月 江戸書林 本銀町川岸 山城屋新兵衛版

「女大学」は、女性が社会で生きていくために必要な知識や心構え、振る舞いを学ぶことを指します。儒教の教えに基づいた「三従(幼少期は父に、成人しては夫に、老いては子に従う)」や「四行(婦徳、婦言、婦容、婦功)」といった教えを学び、礼儀作法や家事、裁縫などの技術を身につけることが中心でした。



ー それ女子は成長して他人の家へ行き、 舅・姑に仕えるものなれば、男子よりも親 の教え緩にすべからず父母寵愛…



『新編女今川』

刊記が欠落しているため出版圓、版元不明 『女今川』は寺子屋などで女性の教訓書及 び習字手本としても使用されました。

◆読下し文

新女今川

凡そ女の気随の品たければ、さしあたり慎までかなわね。かぞく大ようをいはば先 は、

- 一 父母の仰せを能くききて背かず、女は 十歳ばかりにもなりては外へむさと出ぬも のなり
- 一 一身の行作はいうに…



『實語教童子教餘師』041-D-55

天保 15 年 (1844) 正月

東都書肆 横山町三町目 和泉屋金右衛門、本銀丁河岸 山城屋新兵衛

実語教は経典や格言から抜粋した五言絶句 48 連で構成されており、道徳や礼儀作法、人との付き合い方などを教えています。

童子教は、仏教的な教えや日常生活での行儀作法、人との付き合い方などが、330 句でまとめられています。

共に寺子屋などで読み書きの練習と道徳教育の教科書として使われました。『實語教童子教餘師』 は實語教と童子教の解説書になります。

◆読下し文

実語童子の二教は何人の作なる事を知らず相伝えていう。弘法大師の作なりという。或いは護命僧正の作ともいえり。亦童子教は五大院の安然和尚の作なりともいえり。俱にその真偽をしらず。然れども古く童の為に作りもうけて教えとなすものなれば、これを誹謗することなかれとなり、強いて文意を論ずべからず。

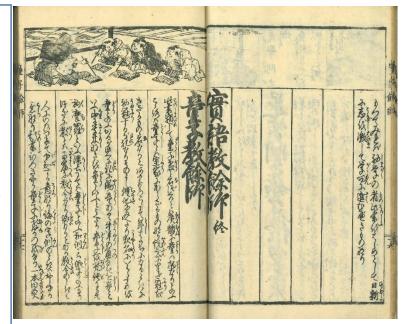
▼實語教餘師

此の書名づけて実語教となつくるとは大 般若経巻第四百五十七の実語品より出た り。又法華経従地酒出品に、我今実語を 説く。汝らいわん信ぜよとあり、金剛教 にも如来此の実語は真語者と見えたり。 涅槃教巻第二十七に正語実語時語とかの 熟語あり。これらは仏説により実を語と いう義なり。教は効なり、論なり。空海



▼童子教餘師

此の書題して童子教と名づくるとは広韻に 童は独なりとのいうこころは、童子とは室 家にあらざるものなり。説文にいまだ冠を きざるもの名なりとあり。もろもしにて年 はたちになるときに初冠するが礼なり。そ のよし礼記にみえたり。釈名にいわく十五 を童といふかるがゆえに礼に陽童あり。牛 未の角なきを童という山に草木なきを童と いうとみたり。童子を梵語には狗摩羅とい う。漢土にては童子という和訓には振子と いうなり。つぎに教とは玉篇に教令なり。 かい (言弁に毎) なりとあり、教令のときは 人にいいつけて下知する意なり。海の字訓 のときはかい (言弁に毎) ゆる意なり。斯書 ひっきょう童子に教るの義なり。一本田五 大



『童子千字文』052-D-68

文政 9 年(1826)秋 東都書林 馬喰町二丁目 西村屋與八

千字文(せんじもん)は漢字を覚えるため の小学入門書。書法初字の書ともなる。毎 句四字二百五十句。一字の重複もなく計千 字あるから名付けられた(国史大辞典抜 粋)

句の右側に音読み、左側に訓読みがされている。



『隅田川往来』009(2)-42

天保14年(1843)

東都書林 芝神明前三嶋町 和泉屋市兵衛 江戸の参詣場所や由緒ある場所を取り上げ た往来物です。隅田八景として富士暮雪、 駒形帰帆、洲崎晩鐘、待乳晴嵐、橋塲夜雨、 関屋落雁、潮入夕照、墨田川秋月としてい ます。

◆読下し文

隅田川往来

昨日はご庭前の花に戯れさすがに永き春の日を黄昏はやきと惜しみ侍りきそのせつ御物語申し候すみだ河の事。ふるびたる景色 一日御同道申すべく候。来たる十五日は梅若塚…



『泰平江戸往来』041-D-22

自遣往来 (内題)

文政 13 年(1830)

江戸馬喰町二丁目 書林 森屋治兵衛 『江戸往来 [自遣往来]』は、全編1通の手 紙形式で、年始の挨拶、江戸城内における 年始の儀式等の様子、諸国より流入する土 産・菓肴・衣服・器財・舶来の品々、江戸 の広さおよび町々の方角と士庶の住居が密 集する様などを紹介している。

◆読下し文

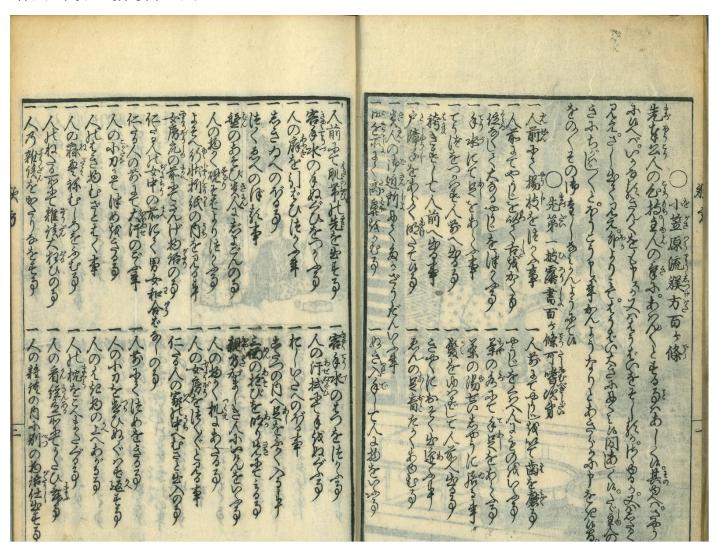
陽春の慶賀珍重にて富貴万福幸甚に日に新たにして自他繁栄重畳今に於いて事旧鉱候といえども今に猶更休期あるべからず。休ご先ずもって年始の御規式、元旦二日御一門の御方々、國主城主の歴々、三献の御祝其外諸侯昵近の面々、詰衆番頭、物頭、諸



【小笠原流躾方百ケ條】041-D-54

天保 14 年(1843)正月吉日再板 江戸馬喰町二丁目角 地本問屋永壽堂 西村屋與八再板

小笠原流は、弓術、馬術、礼儀作法などに関し流派がありますが、『小笠原流躾方百ケ條』は礼儀 作法に関する指導書です。



◆読下し文

まず奉公人の心持。主人の気に。あわんとする事はあしく候。其のゆへは。さように候へば。いかなるきんくをも申すか、又はほうばいをそしるか。つくゆるか。又はしたなく見え。さし出でて見え。外より見て。ほうばい大きに丹くは候間あしく候。ただ主人の気にちがれじちがわと。ほうこう申す事かんようなりとあきらかに申しおき候間。をのをのその御たしなみかんようにて候。

○先ず第一披露書百ケ条嗜むべき次第

- 人前にて楊枝をつかう事
- 一 人前にてようじを以って舌をかく事
- 一 位なくして大なるようじをつかう事
- 一 手水(ちょうず)にて足を洗う事
- 一 てうづをつれず人前へ出る事
- ー 袴きずして人前へ出る事

- 一 人前にてようじを以って歯を磨く事
- ー ようじをくわえ人にものをいう事
- 一 茶の水にて手足をあらう事
- 一 茶の湯せいしょうに居る事
- 一 髪をゆわずして人前へ出る事
- ー きゃくにおそく出逢う事

一 戸障子をあらく明たて候事 一 えんの足音たかくあゆむ事

ー 貴人の御近所にて多々ざうだんいう事

一 御近所にて高鼻をかむ事

一 人前にて肌帯の先を出す事

一 客手水のてぬぐいをつかう事

一 人の扇を引ばいつかう事

ー しきいへのぼる事

一 つくえへのぼる事

一 盤のあそび貴人にじょごんの事

一 人の物かく硯そばよりつかう事

よそへ行く状折紙の内を見る事

一 女房衆の前にてさんげ物語りの事

一 仁たる人の女中の前にて男女和合ばなしの事

ー 仁たる人の前にて大汗のごう事

一 人の小刀にてつめをきる事

一 人のはきものむざとはく事

一 人の寝畳ねむしろをふむ事

一 人のねたる所にて雑談大狂いの事

一 人の雑談をかたりなおす事

ー ぬき入手して人にものをいう事

客手水のはつをつかう事

一 人の汗拭いにててをぬぐう事

ー おしいたへのぼる事

一 こたつの内へ足をふかく入る事

一 三面の遊びを明り先にて見る事

一 親方かましき人にいけんをいう事

一 人の物かく机にあたる事

一 人の女房をつくづくと見る事

一 仁たるひとの中へむさと出入りの事

一 人前にてつめを切る事

一 人の小刀を遣いぬぐわす返す事

一 人のはき物の上へあがる事

一 人の枕をこえまたぐる事

一 人の看経有る所にてうたい舞う事

一 人の雑談の内に別の物語仕出す事

【菊壽百人一首千代松】041-D-53

天保 10 年(1839)3 月 西村屋與八原板 東都書肆 榮久堂山本平吉



(小倉) 百人一首は百人の歌人から秀歌を一首ずつ集めたもの。

室町時代には和歌・蓮歌の専門家に継承され、江戸時代からは教養書としても、広く一般に愛唱活用されるようになった。(国史大辞典抜粋)

第 1首~24首 万葉集の時代~平安時代初期

第25首~49首 平安時代前期

第50首~69首 平安時代中期

第70首~86首 平安時代後期

第87首~100首 平安時代末期~鎌倉時代初期

菊壽百人一首千代松は絵入小倉百人一首本で、下段に百人一首を、上段には「三十六人女歌仙」や「女諸礼躾方」などを配し、往来物的な性格もみられる。

(下段:百人一首)

◎安倍仲麿 天の原ふりさけ見れば春日なる 三笠の山に出でし月かも

◎喜撰法師 わが庵は都のたつみしかぞ住む 世をうぢ山と人はいふなり

◎小野小町 花の色はうつりにけりないたづらに わが身世にふるながめせし間に

◎蝉丸 これやこの行くも帰るも別れては 知るも知らぬも逢坂の関

(上段:三十六人女歌仙)

◎左 殷富門院大輔 何かいとふよもながらへじさのみやは 憂きにたへたる命なるべき

◎右 俊成卿女 おもかげのかすめる月ぞやどりける 春やむかしの袖の涙に

◎左 右近 逢ふことをまつに月日はこゆるぎの 磯にや出でて今はうらみむ

◎右 待賢門院堀河 うき人をしのふへしとはおもひきや わか心さへなとかはるらん

※平安時代前期から鎌倉時代中期の女性歌人 36 人を、18 人ずつ左方・右方の 2 組に分け、左方に小野小町から相模までの中古歌人を、右方に式子内親王から藻璧門院少将までの中世初頭の歌人を配しています。

【御江戸繪圖】

展示資料の武漢に書かれている上屋敷住所「南八丁堀」は の辺りになります。 この絵図では明確ではありませんが、国立国会図書館が所蔵する江戸切絵図「築地八町堀日本橋南絵図」嘉永2年(1849)-文久2年(18 62)刊では堀長門守と家紋の記載があります。



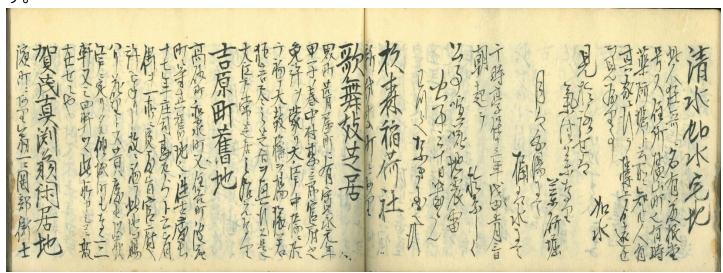
『江戸切絵図 築地八町堀日本橋南絵図 (一部)』



【江戸名勝志】001-Ⅱ-B-4-81

江戸名勝志 東都松濤軒 長秋著 弘化四年夏六月観連節節一日 信陽須美坂(すみさか)鴻巣澤之瀬主…筆写をした人

江戸の景勝地や名所旧跡を紹介する内容で、当時の文化や風俗を知る上で貴重な資料とされています。展示品は刊本ではなく筆写本で、元となった本は不明です。全三巻を合冊して一冊にしています。



◆読下し文

清水如水宅地

此の人狂歌二名あり。藤根堂と号す。住所横山町也。ある時、薬研堀という所に知れる人有り。その家に行って楼上より遠近を見やる事

如水 「見下ろせば気の薬なり薬研堀 月は白湯にて楠は水にて」

享保十三年戌申正月三日、朝起きて

「公事喧嘩地震雷三十日飢饉煩いなき国に行く」

杉森稲荷社

新材木町にあり

歌舞妓芝居

界町葺屋町に有り寛永元年甲子の春中村甚三郎官府の免許を蒙り大江戸中橋に於いて初めて太 鼓櫓を揚げ、猿若狂言尽の芝居を興行す。これ大江戸常常芝居の始元なり

吉原町旧地

高砂町和泉町又住吉町波座町等、其の旧地の往古慶長十七年庄司甚左衛門という者、偶を一所に 定度官府へ許奉り候ゆえに、初めてこの地を賜り花里とす。昔は慶長以前は江戸に定まりたる。傾 城町もなく一二軒又三四軒づつ此所かしこに散在せしや

賀茂真淵翁閑居地

【武鑑】

江戸時代大名諸家・幕府諸役人を記載の主体にして編輯・出版された武家の名鑑。戦国時代以来、各大名の間で軍役の編成などの目的で所領地や石高順に作成された分限帳や補任録などの公簿とは異なり、民間の書肆の手によって編集・出版された。

その体裁は、半紙半切の縦本 4 冊から成り、第一巻は御大名衆(十万石以上)、第二巻は同(十万石以下)、第三巻は御役人衆、第四巻は西御丸附から成り、毎年毎月・御役替・屋敷替ごとに改訂増補することを慣例としていた。

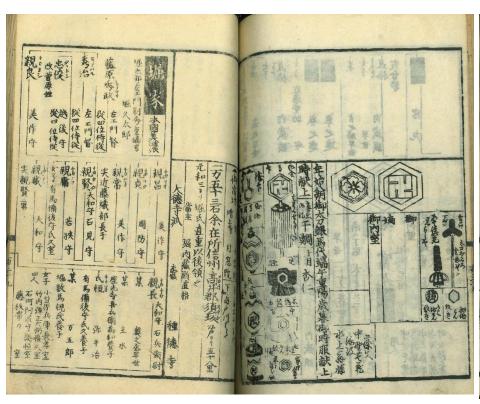
武鑑は閉鎖的な武家社会の情報の窓口として、江戸屋敷在勤の武士は日常政務上の折衝や交際の基礎資料とし、また出入りの商人は商取引にこれを活用していた。さらに、農村の村役人らは訴願の相手を知るために、また帰国する武士は国元への江戸土産として買い求めたという。(国史大辞典抜粋)

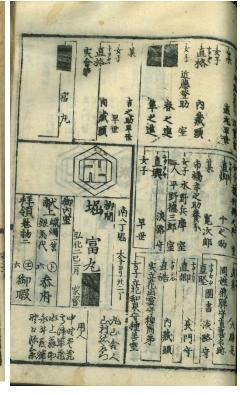
【泰平萬代大成武鑑】041-D-79,80

『泰平萬代大成武鑑』は全四巻からなるが、文書館では巻之一、巻之二、巻之四を収蔵しています。 収蔵する武鑑には刊記の記載がないため出版年は不明ですが、須坂藩主名は「豊丸」で弘化 2 年 (1845) 二月に家督相続していますので、これは 12 代「直武」であり、幼名のまま記載されてい ることから弘化 2 年、出雲寺万次郎の刊行と思われます。

武鑑には系譜の記載がある都合上、一族ごとにまとめられており、例えば堀家(奥田家)の欄では ①越後村松藩(三万石・現新潟県五泉市) ②越語椎谷藩(一万石・現新潟県柏崎市) ③須坂藩 の順に記載されています。なお、飯田藩の堀家は系譜が違う(もともと奥田家の主家)ため、別欄 となっています。

松代藩十万石の真田家は巻之一に掲載されており、藩主は八代藩主真田幸貫(ゆきつら)となっています。





『日本沿革 豊臣御武鑑』041-D-83



刊記がないため出版年、版元など不明。

五奉行は前田玄以、浅野長政、増田長盛、石田三成、長束正家とされていますが、当武鑑では増田 長盛、石田三成、大谷吉高、前田法印、長束正家となっています。また、五大老は徳川家康、前田 利家、宇喜多秀家、上杉景勝、毛利輝元ですが、江戸時代の発刊のため徳川家康の記載はありませ ん。堀家(本家)の堀左衛門尉秀政が遠州小俊三十万石で「御譜代面々」として記載されています。 また、真田伊豆守信幸は「御譜代」の欄に記載されています。

【俳句】

『芭蕉袖草紙 四季発句集』001-Ⅱ-B-4-72

文化8年(1811)8月

大阪 浅野高造筆工 花屋菴奇淵 校

四季の月ごとに季語をあげ、対応した句を花屋菴奇淵が選んだ発句集(季語集)です。



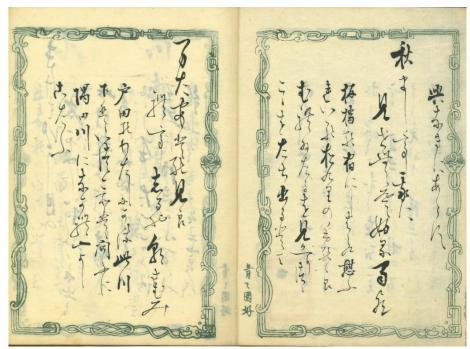
六月	六月や峰に雲おく嵐山	芭蕉	礻
	六月や風に吹かれて故郷へ	鬼貫	
	六月の雨もつ門や升尾	虚谷	徂
	六月や夕暮はあり三井のかね	蓼太	
水無月	みな月や鯛はあれとも塩鯨	芭蕉	亨
	みな月やとりおくれたる舟日待	奚魚	斿
氷室	六月のみかん見せけり氷室守	言水	月
	蚊やにねる都は寒し氷室守	二柳	
	氷室守近く召しなば消へぬべし	大江	
丸			킅
氷水	見にゆかん氷水召す日の	二柳	
一夜酒	蓮のはもみなひろかりぬ一夜酒	盤水	
富士もうで	昭片端拝みながらやフジ系	治湖	
	田の草に追われ追われて富士詣	奚魚	

祇園會	ぎおん會や真葛が原の風薫	蕪村
	月鉾や人声起る山かつら	暁臺
御祓	行にや汗もほこりも夕祓い	立圃
	つくばふた禰宜でことすむ御祓哉	蕪村
茅輪	手をかけて品のよからぬ茅の輪哉	言水
施米	腹あしき僧こぼし行施米哉	蕪村
風薫	風かほる里や千尋の竹の奥	蘭更
	何もなき所なりけり風かほる	窓巴
	さざ波や風の薫の相拍子	芭蕉
青嵐	浮雲や左右にわけて青嵐	史邦
	村雨に品もくづさず青あらし	重厚

『戌子信濃路之記 完』092-A-11

玉弓楼江聲(第11代須坂藩主堀直格自筆本)

文政 11 年 (1828) 8 月 6 日江戸を出立し、12 日に須坂に到着するまでの紀行文です。27 句が添えられています。





〇秋まして我にみせむはふる雨朝

板橋の宿にしばらく憩ふ、れいのおくりものら むれいたるを見かへりつつ、ここをたち出るとて

〇またあとの見られてしるや

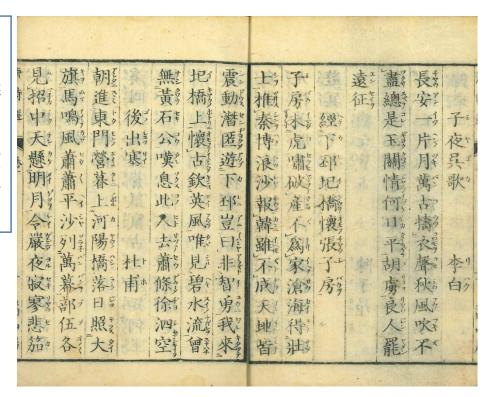
戸田のわたしにかかる。此川したはいづこと問ふに 墨田川にながれ入るよし、こたふ ことし文政十一年葉月 はじめの六月といふに、 しなぬなるしるよしへ おもむかむと、夜をこめ て立出たるに、秋の雨 しめやかに降出たる あけぼのの景しき、又 (興なきにあらず)

【漢詩】

『唐詩選』065-C-119

東京書肆 嵩山房

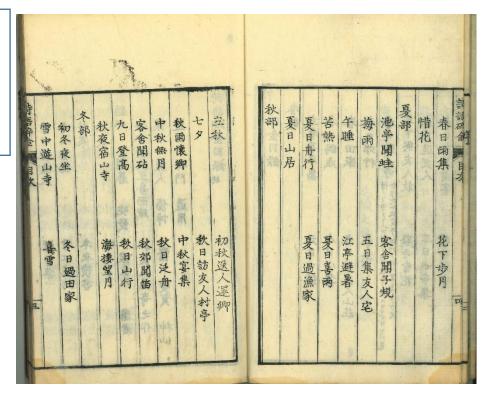
唐詩を 465 首(作家 128 人)選びこれを五言古詩・七言古詩・ 五言律詩・五言排律・七言律詩・ 五言絶句・七言絶句の順に分類 して集めたもの。(国史大辞典 抜粋)



『詩語碎金 (しごさいきん)』052-D-12

弘化二年(1845) 大阪書肆 心斎橋通塩町東工 入 九屋勝蔵

漢詩創作のための資料集



【狂歌本等】

狂歌は和歌の形式の中に反古典的な機知や俗情を読み込む文芸で、よく人に知る文芸や成語のもじり、あるいは縁語・掛詞の複雑な組み合わせなどの技巧が好んで用いられる。狂歌という名称は平安時代から既にあって、かなり作られていたが歌道の神聖を憚って狂歌云捨ての現読が守られての出ほとんど伝存せず、わずかに鎌倉時代前期の曙月房(阿仏尼の子)の『酒百首』が伝写されて残るくらいのものである。(中略) しかし狂歌の流行はそれとは卯関係に大衆層に広がり、江戸狂歌と浪花狂歌の差別も失われ、おしなべて低俗に堕して幕末から明治に至ったのである。ひっきょう狂歌は本質的に高度の教養を要求する文学であって、庶民の文学たり得なかったといってよい。(国史大辞典抜粋)

『意気迺通家会』071-F-28

刊記なし

著者 竹葉舎金瓶

歌占本にあたる

- ◆読下し文
- 十 天澤履

(上段)

ないしょのことを人に見いだされて大きにおどろくことあり。それが縁となりてねがいごと叶うことあり争はずにありていにすべし。縁結びととなうべし。しかし先に何かあってやはらがぬなり。待ち人来るうせもの出がたし。

(下段)

花のえがおでみきほの松の色も替 らずぬしのそば

十一 地天泰

(上段)

見たところではほめたり。又きやすめをいえども心のうちにては悪く思うかたちなり。めったにはのりがたし。物ごとまちがいくらうをする。願い事年を経ざればかなわずうせもの出べし。待ち人来るなり。

(下段)

ねんき明けたらこの風呂しきをお まえに背負わせて外へ行く



『高点 狂歌千歳集』092-A-10

寛政 11 年(1799)春

画工 北斎

筆工 六蔵亭

彫刻 安藤圓紫

書林 東都通油町 蔦屋重三郎

大河ドラマ「べらぼう」の主人公 蔦屋重三郎が営む「耕書堂」が日本橋に店を構えてから出版した狂歌本です。重三郎も「蔦唐丸」という狂歌名で狂歌を詠みましたが、この本に重三郎の狂歌は載せられていません。

北斎が江戸の名所など挿絵を描き、 狂歌と交互に乗せられています。そ して蔦屋重三郎の営む「耕書堂」が 紹介されています。



【草双紙】

江戸時代中期から後期へかけて、江戸で刊行された大衆的絵入小説の一体。通常毎頁挿絵があり、 これが主体となってその周囲はほとんどひらがな書きの本文が埋め、画文が有機的な関連を保ちつ つ筋を運ぶ様式をとる。

表紙色と内容の変化がほぼ呼応して、赤本・黒本・青本・黄表紙と進展し、次いで装幀の変革を伴って合巻に展開、明治中期まで制作された。

赤本は童幼児向きの教化娯楽題材、黒・青本ではやや程度を高めて夢幻性を増し、貴表紙は滑稽洒脱の写実味が特徴。合巻は伝奇性の濃い特色をもつ。(国史大辞典抜粋)

『わかむらさき』092-A-23-3

刊記なし(序金鈴舎一寶)

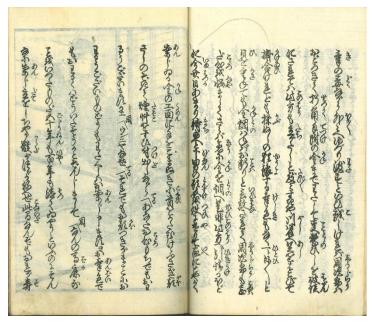
金鈴舎一寶は十返舎一九の門人。『わかむらさき』も編により内容は違うようだが、本編は人情本。

◆登場人物紹介

福増屋 周次郎、貞婦 於照 あすか川あすのふち瀬もしら波の

ゆくすへかけて出るはかなさ 文溪堂 千歳





◆書下し文

気の毒ながら外々へ譲り渡すといい越しければ周次郎はおどろきて折角手付けの金までわたして、事整いしを破談にされてはこの方も立ちがたしと度々すきや川岸へ足を運びて掛け合いけれども、株主の猶予する気色もなくひと日ひと日と日を重ねても金ととのわねばお断わりと言い放たれて、周次郎も甚だ心を悩まして、さらば急に金をととのえ是非この方へ引き請けるほどに、いま二十日あまり待ちなえと下男のとんすけを使いにやりて家にとやかく案じいる金の工面手をこまねき小首を傾けふさぎ顔、さしのぞきて煙草をすいつけ出しながら、(てる)「あなたお心もちでもおわるうございますかえ」(周)「うんにゃなぜ」(てる) それでもお顔つきがまことにおわるうございもの。どうもわたくしはお案じ申しますよ。あんばいでもお悪くはどういたそうかとぞんじまして」(周)なんの馬鹿なことをいったものだ。五十年も百年も添っていようというのに、そんなにそんなに案じたてをしちゃあ體がつづかねえぜ。こないだなんぞもおれが…

【歌舞伎床本】

床本(ゆかぼん)とは、歌舞伎の義太夫狂言などで、浄瑠璃を語る竹本の太夫が舞台上で使用する 台本のことです。義太夫の詞章や節付けのほかに、語り出しのきっかけとなる俳優の台詞や演技、 竹本の三味線方の譜や演出などに関する書き込みなど様々な情報が書き込まれています。

『仮名手本忠臣蔵 九段目 山科の段』041-D-85

馬喰町二丁目 森屋治郎兵衛板

◆読下し文

風雅でもなくしやれでなく、しやうことなしの山科に、由良助がわび住居、祇園の茶屋にきのうから、雪の夜明かし朝戻り、牽頭(たいこ)中居に送られて、酒がほたへる雪こかし



『伽羅先代萩(めいぼくせんだいはぎ)六ツ目切 政岡飯焚の段』041-D-84

喰町二丁目 森屋治郎兵衛板

◆読下し文

押し明け入りける跡見送りて政岡がま さなき事も者にはる科は晴れても晴れ やらぬ養い君の行く末を誰に問うべき 様もなく、心一つのうき思い物案事成り 母親の顔を詠むる子松に…



もんじょ紹介 No.32 ============

発行 2025(令和7)年7月 須坂市文書館 須坂市大字須坂812番地2 (旧上高井郡役所内)

TEL 026-285-9041

FAX 026-285-9175

==============